

研究ノート

## ウルク中・後期における外傾面取口縁鉢をめぐり一考察

三宅 慶

外傾面取口縁鉢 (Bevelled-rim-bowl: BRB) は都市化が進化したウルク中・後期に突如出現する、大量生産された小型の粗製鉢である。その製作技術や機能にかんする研究は長期にわたり盛んに行われてきた。本稿では、筑波大学所蔵の BRB 3 点を観察し、それらの先行研究を参照しつつ、その製作技術や機能の再検討をおこなった。

製作技術を検討した結果、BRB は型をもちいて製作されたことを確認できたが、利用された型の素材を明らかにすることはできなかった。また BRB に一定の規格性が認められないことから、その機能を考察するために遺跡の出土状況を検討した。そしてその中で、「大量一括廃棄」という行為に注目し、それらが「饗宴」

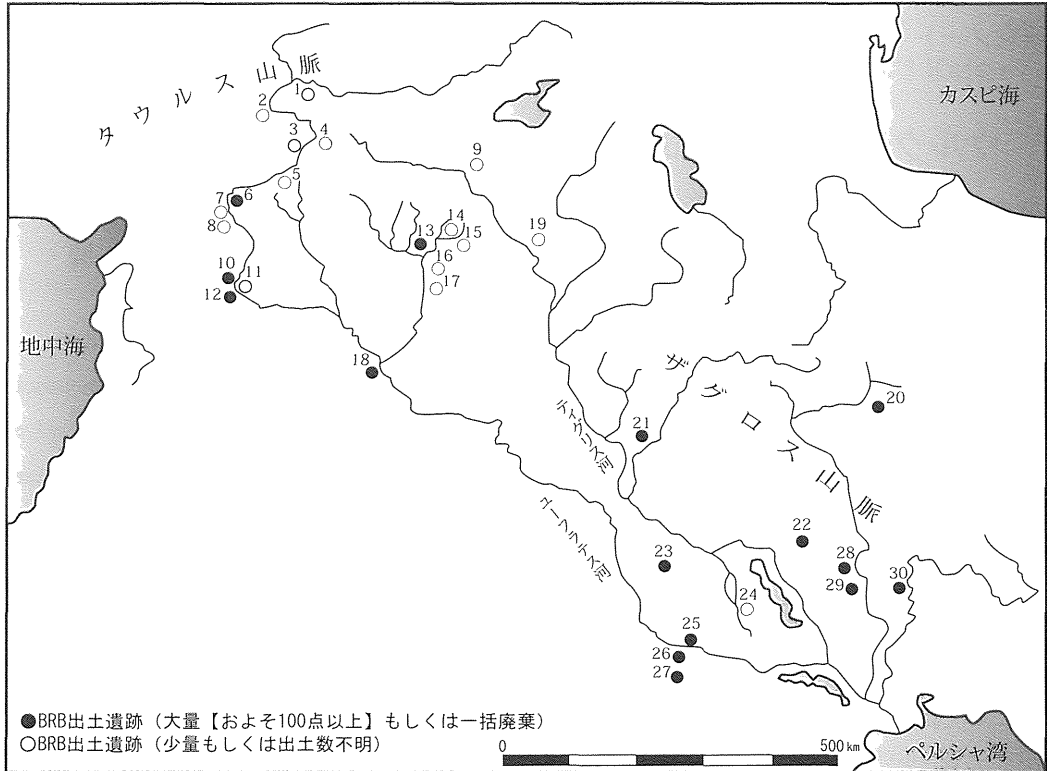
に使用された土器である可能性を指摘した。

これらを踏まえ、本稿では最終的に以下の見解を提示した。それは、BRB が饗宴の際に使用されたと考えられるものの、「祭祀具」か「生活用具」という二項対立の図式では BRB の持つ意味を明らかにできないというものである。そして日本の中世で確認される「カワラケ」の解釈を参考にし、BRB が二面性を併せ持つ遺物であったと想定した。この BRB における二面性はチョガ・ミシュやハジネビなどの遺跡での出土状況に看取できる。つまり従来のように、広い地域に分布する BRB に単一の機能を想定するのは妥当ではないと言える。BRB の拡散に際し、地域や社会集団によってその用いられ方が異なっていた可能性も十分に考えられる。

### I. はじめに

南メソポタミアを中心に展開したウルク (Uruk) 期<sup>1)</sup> (紀元前 4 千年紀) は、「工芸の専門化」、  
「身分の階層化」、「都市化」といった一連のプロセスが生起した人類史上重要な時期であることはよく知られている (小泉 2001)。本稿で分析の対象とする外傾面取口縁鉢 (Bevelled-rim bowl: 以下 BRB と表記) は、そのウルク中・後期に突如出現する非常に画一的な土器である (第 1 図)。それはアナトリアやシリア、イランといったメソポタミアの周辺地域へのウルク文化拡散現象、いわゆる「ウルク・エクспанション」(Algaze 2005) の指標となる遺物としても知られている (Wright 2001: 125)。それゆえに BRB にかんする研究は、当該期を理解するうえで大変重要な意味をもつと言え、これまでも多くの議論がなされてきた (例えば Golder 2010; Potts 2009; Beale 1978; Johnson 1973)。

しかし、そのような活発な議論が展開されてきたものの、BRB の製作技術や機能など、未だ解明されるに至っていない点も多く残されている。それにもかかわらず、無批判に従来の学説



- |              |                  |                 |             |
|--------------|------------------|-----------------|-------------|
| 1. テベジック     | 9. バシュル・ホユック     | 17. マシュナカ       | 25. ウルク     |
| 2. アスランテペ    | 10. ジェベル・アルーダ    | 18. クラヤ         | 26. ウル      |
| 3. サムサット     | 11. テル・シェイク・ハッサン | 19. ガウラ         | 27. エリドゥ    |
| 4. ハセック・ホユック | 12. ハブーバ・カビーラ南   | 20. ゴディン・テペ     | 28. シャラハバード |
| 5. クルバン・ホユック | 13. テル・ブラク       | 21. テル・ルベイデ     | 29. スーサ     |
| 6. ハジュネビ     | 14. テル・レイラン      | 22. ファルハバード     | 30. チョガ・ミシュ |
| 7. シャラガ・ホユック | 15. ハモウカル        | 23. テル・アブ・サラビーフ |             |
| 8. カルケミシュ    | 16. ウム・クセイル      | 24. テロー         |             |

第1図 BRB 出土主要遺跡分布図

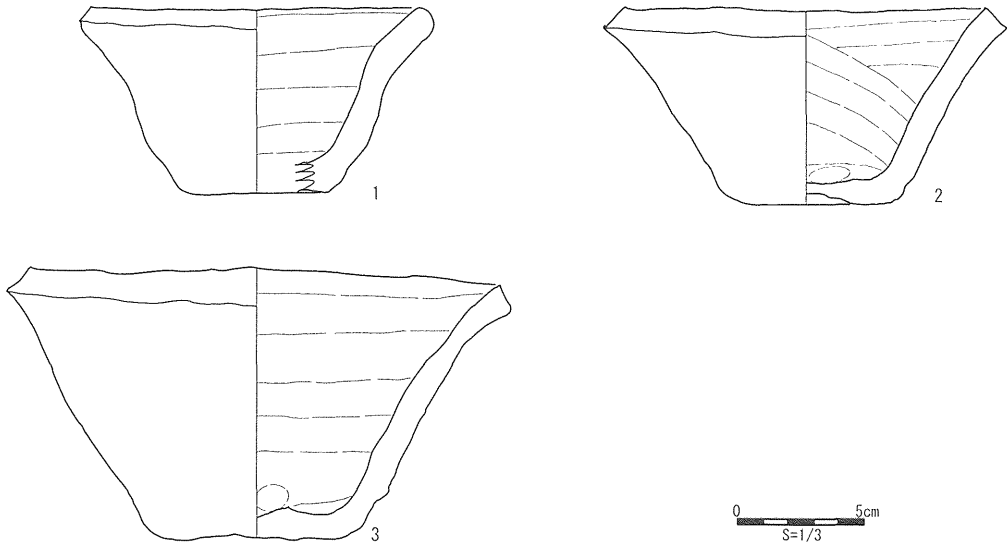
をトレースし、それに基づいてウルク期の社会について論じた論考もいくつか散見されるなど（例えば Nissen 1988; Pollock 1999: 95），問題も生じている。

本稿ではこの状況を打破するために、まず筑波大学に所蔵されている BRB3 点を詳細に観察し、先行研究を参照しつつその製作技術や機能にかんして考察を加えてみることにした。そして、それらを踏まえ各遺跡での出土状況を整理し、現状における筆者なりの見解を示してみたい。

## II. 筑波大学所蔵資料の紹介

### 資料1（第2図：1）

本資料は約二分の一が欠損している。口径は約 13cm，器高は約 7.4cm である。実測図から簡易的に容量を算出したところ，約 0.55ℓであった<sup>2)</sup>。胴部上位から口縁部にかけて大きく外



第2図 筑波大学所蔵のBRB（筆者実測）

反し、胴部から底部にかけては緩やかに内湾している。口唇部は外側に向け傾斜し、ケズリ調整が行われている。また、一部ナデ調整によって丸味を帯びている部分もある。外面は未調整で粗雑であるが、ナデたような痕跡も窺える。内面は、一定方向のナデによって口縁直下までよく調整されているが、一部亀裂の認められる部分も存在する。底部は欠損しているため、明らかではない。断面には繊維脱痕が確認でき、多量の植物繊維を混和していたことが明らかである。内側の器面全体には白色粒子が認められる。色調は内面が黄橙色、外面が浅黄橙色を呈する。底部断面には黒芯が確認される。器面には焼きむらが残るが、硬く焼きしまっている。

資料2（第2図：2）

本資料は約三分の一が欠損している。口径は約14.2cm、器高は7.8cmである。容量を算出したところ、約0.3ℓであった。資料1とは若干異なり、底部から口縁部にかけて緩やかに外反している。内面は軽いナデ調整が行われているが、調整痕間での切り合いが観察され一定方向のナデとは言い難いものである。また、口縁部は資料1と比較するとケズリ調整がより顕著に認められる。底部では、指圧痕の上をナデによって調整した跡が窺える。器厚はおおよそ均一であるが、底部中央部はやや薄くなっている。混和材は資料1と同様であると思われるが、繊維脱痕は顕著ではない。色調は内面が明赤褐色、外面が浅黄褐色を呈す。断面に黒芯は見られない。また本資料も資料1と同様、焼きむらが残るが硬く焼きしまっている。

資料3（第2図：3）

口径は18.5cm、器高は10cmである。本資料は残存状態が良好であるため、実際に内容物を入れ容量を算出してみた。その結果は1.262ℓであった。資料1、資料2とは色調とサイズが著しく異なる。器形は資料2と同様に、底部から口縁部にかけて緩やかに外反している。内面は資料1と同様に、一定方向の軽いナデによって口縁直下までよく調整されている。砂粒の移動

第1表 筑波大学所蔵 BRB 観察表

番号	胎土（肉眼観察）	焼成	色調	サイズ	器面調整
BRB-1	スサ及び 1mm 以下の白色粒子を多量に含み、3mm 程度の白色粒子を少量含む。	良好	外面：黄橙 7.5YR7/8 内面：浅黄橙 7.5YR8/4	口径：13cm? 器高：7.4cm	〈内面〉 ナデ 〈口唇部〉 ケズリ
BRB-2	スサ及び 1mm 以下の白色粒子を多量に含み、3mm 程度の白色粒子を少量含む。	良好	外面：明赤褐 2.5YR5/8 内面：浅黄橙 7.7YR6/8	口径：14.2cm? 器高：7.8cm	〈内面〉 ナデ 〈口唇部〉 ケズリ
BRB-3	スサを多量に含み、1mm 以下の白色粒子 3mm 以下の黒色粒子を微量に含む。	良好	外面：浅黄橙 10YR8/4 内面：浅黄橙 10YR8/4	口径：18.5cm 器高：10cm	〈内面〉 ナデ 〈口唇部〉 ケズリ

の痕跡から反時計回りに調整されたことが確認される。底部には指圧痕がはっきりと確認でき、その後ナデによって調整した痕跡が観察できる。器厚はその他の資料同様ほぼ一定で、色調は白色に近い黄褐色である。

### Ⅲ. 研究抄史および筑波大学所蔵資料の位置づけ

#### 1. 製作技術

BRB の製作技術については、型製作とする考えと手づくねによるとする考えの 2 つに大別される。BRB が型に押しつけて製作された土器であると主張したのは、ジェノーラックが嚙矢となる (Genouillac 1934)。その後、ニッセンによっても同様の指摘がなされ (Nissen 1970)、さらにジョンソンはその製作工程を詳細に復元し、型おこしによる製作の利点についても言及した (Johnson 1973: 130-131)。ジョンソンが想定した工程は、①型となる粗雑なピットを地面に掘り、②粘土に大量の植物繊維を混和し、③指もしくは拳を使い、粘土を型に押しつけた後に内面の調整を行い、④口縁部の面取りをし、⑤天日で乾燥させ、⑥硬くしまったところで型から取り外し、⑦簡易的な窯で焼き上げる、というものである。このような工程を想定できる根拠としては、粗雑な外面、なめらかな内面、面取りされた口縁、内面底部の指圧痕という 4 点が挙げられている (Nicholas 1987: 62)。この手法による製作上の利点は「時間」の短縮と省力化であり、こうした製作工程の復元は多くの研究者によって支持されてきた (Beale 1978: 289; Strommenger 1980: 58; Miller 1981: 128; McAdam and Mynor 1988: 40)。実際、このような手法で BRB を製作できることは製作実験によっても確かめられている (Golder 2010)。それは、粘土にわらや砂粒を混和し<sup>3)</sup>、地面を掘りくぼめた型にそれを押しつけ、600-700 度の低温焼成で製作するというものである。(Golder 2010: 351-352)。

これに対し、地面を掘りくぼめた型によって製作されたとする考えに批判的な見解も認められる (例えば Balfet 1980: 78; Charvat 2002: 124; Crawford 2004: 164)。それらは型おこしによる製作を想定するという点では同じだが、木製もしくはその他の材質の型による製作を想定している。その根拠は、地面を掘りくぼめた型にはめたままでは、口縁部と内面をなめらかに調

整するのは困難であること、そのような遺構や民族誌的事例が見られないこと、の2点が挙げられている(Balfet 1980)。その他にもBRBが手づくねで製作されたという論考も見られるが<sup>4)</sup>、多くの研究者が型おこしによる製作であったと考えている。

以上の先行研究を踏まえ、筑波大学所蔵資料について検討してみたい。所蔵資料は、まず、面取りされた口縁、有機物の混和、粗雑な外面、調整された内面という点では共通している。また外面に凸凹が観察されるものの器厚がほぼ一定である点や、口唇部に湾曲がみられ面取り後にナデが行われたという点でも共通する。成形技術は、輪積み痕が見られないことから粘土板などで製作したことが推定されるが、詳細については不明である。これらの製作技術にかんしては、紹介資料3点だけから明らかにするのは困難であるが、口縁部の面取りは型から取り外す際に行われた一工程であるとの推定は可能である。したがって、やはり型おこしによる製作とするのが妥当であろう。

製作技術そのものについてはないが、BRBの製作地をめぐる近年興味深い分析結果が得られている。スシアナ平原に位置するチョガ・ミシュ(Choga Mish)遺跡とシャラファバード(Sharafabad)遺跡出土のBRBを対象に中性子放射化分析が行われ、胎土を構成する微量元素が2つの遺跡間で明確に異なることが確認されたのである<sup>5)</sup>(Alizadeh 2008: 93-99)。従来、BRBを含む土器群はセンターとされる遺跡の工房で大量に生産され、地域の交換システムのもとで流通していたとされてきた(Wright and Johnson 1975)。ライトは、この仮説を実証するためシャラファバードとKS-54遺跡の調査を行い両遺跡は独立した集落ではなくチョガ・ミシュに経済的に従属していた遺跡であるとした(Wright 1998)。これに対し、先に示した分析結果は上記の論を否定する形となっている。つまりBRBはそれぞれの遺跡で独自に生産されていた可能性が指摘されたのである。BRBの製作地を巡っては諸説あり、一概に各遺跡で生産されていたとは言い切れないが<sup>6)</sup>(Alizadeh 2008)、この結果は従来の見解に再考を迫るものとなっている。

## 2. 機能

BRBの機能をめぐる議論にも諸説あり、製作技術以上に多様な見解が認められる(例えばJohnson 1973; Beal 1978; Millard 1988)。基本的にはBRBに規格性を認めるか否かによって大きく2つに大別できる。1つ目は、BRBに一定の規格性を認め中央集権的な行政コントロールを想定する考えである。もうひとつは、規格性よりもむしろ遍在的であることに注目し、日常的な遺物であったとする考えである。これは、各研究者がウルク文化をどのように捉えるかということを反映している。ここではまず、問題の核となる「規格性」の有無について検討を行い、その後いくつかの説を提示していくことにする。その際に筑波大学所蔵資料についてもこれらの枠の中に組み込んでみたい。

### (1) 労働に伴う再分配用の鉢：定量鉢(Ration Bowl)

BRBが、再分配システムの下で使用された計量用の鉢であるとする見解を最初に提出したのはニッセンであった(Nissen 1970: 137)。ニッセンはまず、ウルク-ウルカから得られた1520

点の BRB を基に、この土器が大量生産されたものであると指摘し、さらにジェムデット・ナスル期の文字資料を参照して上記の機能を想定した。その後、ジョンソンがスーサ(Susa)遺跡とフージスタン(Khuzistan)地域で得られた BRB を分析し、その容量が 0.90, 0.650, 0.450 の 3 つに大別できると指摘した。このことから BRB には一定の規格性が認められるとして、ニッセンの説を補強し「分配機能」と「容量の規格化」という 2 つの仮説を提示した(Johnson 1973: 129-139)。ジョンソンが指摘する分配機能とは、行政機関を有しセンターとされる遺跡から、小規模集落に居住する人々が農耕などの公共事業に徴集された際に、その対価として食糧などが配給されるというものである。この分析の対象となった遺跡と資料点数は 5 遺跡、189 点であり<sup>7)</sup>、それぞれの遺跡ごとにその BRB の容量がどのようなピークを示すかを検討した。その結果得られた数値が 0.9220, 0.6470, 0.4650 というもので、これらを切りのいい数値として提示したのが上記のものである。さらにこのデータをもとに 3 つの基準値をカロリーに換算し、それを現代のフージスタン地域において、成人が 1 日に摂取しているムギの量と比較した。その結果、0.60 と 0.450 では十分なカロリーが摂取できないとした。そして最終的にジョンソンは、BRB を「定量システムの操作」と、階層化した集落の間での「強制的な労働」が存在していたことを示す遺物であると結論付けている。つまり、行政機関による労働のコントロールがあったと推定している(Johnson 1973: 139)。

これに反論したビールは、スーサやフージスタン地域の他に、新たにテペ・ヤフヤ(Tepe Yahya)遺跡の資料を用いて容量を算出し<sup>8)</sup>、BRB の規格性を再検討した。その結果、ジョンソンが大枠で捉えていた規格性に疑問を呈し、それを計量用の鉢とする考えに批判的な見解を示した。そして、ビール自身は BRB を行政機関や神殿への奉納を行う際の「奉納用の鉢」であるとした(Beale 1978)。ビールの解釈の是非はともかく、BRB の規格性を否定した点は大きな意味がある。ミレルもまた、ニッセンの仮説を検証するためファルハバド(Farukhabad)遺跡出土の BRB の容量を算出し、やはり規格性は見られないと結論付けている(Miller 1981: 127-130)。

ジョンソンはビールの見解に対し、BRB が奉納という宗教的な行為に関係していたとすると、その分布はあまりにも広範囲にわたり、こうした状況は先例が認められないとして否定的な立場をとった(Johnson 1987)。そして、ライト等が行ったシャファラバードの調査(Wright et al. 1980)及び自身が調査を行った KS-54 遺跡の結果から、計量用の鉢とする説の正当性を再度訴えている(Johnson 1987: 112)。またニッセンも、上述したようにジェムデット・ナスル期の文字資料の中で人の頭部、「定量」または「食糧」を意味するとされる器、それらが組み合わされた「to eat」といったサインを手掛かりに BRB の容量が統一された規格を持ち、公共事業に参加した労働者への食糧配給の際に用いられた計量鉢であるとした。そして、ウルク後期からジェムデット・ナスル期に計量の標準化がなされ、官僚行政システムが出現したと推定している(Nissen 1988, 1993)。しかし、ジョーンズはアブ・サラビーク(Abu Salabikh)遺跡出土のジェムデット・ナスル期のコニカル・ボウルの容量を算出し、規格性がみられなかったことから間接的に BRB の規格性も否定している(Jones 1996)。また、南メソポタミア、北メソポタミア、バリー

フ川流域、ユーフラテス河中流域と広い地域で BRB の容量を算出した富田の論考でも、BRB の容量に統一的な規格は認められないことが示されている(富田 1998)。

以上が BRB の規格性をめぐる議論の概要である。筑波大学所蔵資料 3 点も容量を算出した結果、先に示したように約 1.2ℓ, 約 0.3ℓ, 約 0.5ℓ という結果であった。3 点という資料的制約はあるものの、やはり規格性といえる程有意なまとまりはみられない。したがってビールの見解や、その他の諸論文を考慮すれば、BRB に規格性はなかったという見解が妥当であると言える。

#### (2) 徴税用の鉢

ニコラスはビールの見解をある程度支持するものの、神殿などへの貢献用というよりも、むしろ行政的な徴税用の鉢であるとした。ニコラスの主張で注目すべき点は、BRB は広範囲に長期間分布した土器であるため地域ごとに使い方が異なっていた、という可能性を指摘したことである。そして BRB に単一の機能を求めることに警鐘を鳴らしている。また、ニコラスがここで提示した機能は自身が調査した遺跡に限って有効であると考えている(Nicolas 1987)。

#### (3) パン焼き型(Bread-mold)

ミラード及びチャザンとレネルは、ゴディン・テペなどで BRB が調理用施設から出土していることと、文字資料<sup>9)</sup>、エジプトの類例<sup>10)</sup>などを総合的に検討し、BRB がパン焼き用の型であったと論じた(Millard 1988; Chazan and Lehner 1990)。またポッツはイラン及びパキスタンでの踏査結果を基に、遺跡の規模にかかわらず BRB が認められることから再分配に関わる道具であるとする考えに疑問を呈し、上記の見解に賛同している(Potts 2009)。ニッセンは前述した自説を依然として保持するものの、仮にパン焼き型であったとしても、その背後には中央集権や管理システムが存在したと主張する(Nissen 2002: 9-10)。その他ゴルダーは、実際に BRB 形の土器でパンを製作することができたことからこの機能を想定し、最終的にはニッセンと同様の見解を示している(Golder 2010)。

#### (4) その他

デローガスは、BRB が多孔質であることや、その形態、サイズから、ヨーグルトまたはチーズの製作時に「凝乳」と「乳漿」を分離させるために使用した土器であったと主張し(Delougaz 1952: 128)、現代のイランにも類似する土器があることを紹介している(Delougaz and Kantor 1996: 50)。ブッチェラティは、ヨーロッパの遺跡で確認される「briquetage」と呼ばれる製塩土器と BRB が類似していることから「製塩」のために使用された土器であると主張した。さらにクラヤ(Qraya)ではひしゃく、粗雑な土製大皿、加熱装置とされる遺物とともに、広場から出土していることからこの機能を想定し、運搬する際にも使用されたとした(Buccellati 1990)。フォレストは、BRB を南メソポタミアのエリート層が葬儀やその他の祝宴の際に使用した鉢であると主張した(Forest 1987)。その他、遍在するがゆえに単なる食器であったとする見解や、人口増加に伴う容器への需要増加の結果それに対応するために製作されたという指摘もある(小泉 2000: 28)。

#### IV. 出土状況からみた BRB の諸様相

規格性の存在に否定的な立場を示し、その他の見解についても検討してきたが、BRB の製作技術や器形などの特徴からだけではその機能に迫るのは十分でないと言える。そこでこの問題を検討するため、改めていくつかの遺跡で BRB の出土状況を検討してみたい。

##### 1. チョガ・ミシュ (Choga Mish) 遺跡

チョガ・ミシュはスシアナ平原地域に位置し、土器新石器時代からウルク期ごろまでの層位が確認されている。ウルク前・中期の層位は未確認であるが、後期には公共建築物、一般住居、工房、街路、排水管などが確認され、当該地域のセンターであったと想定されている (Delougaz and Kantor 1996; Alizadeh 2008)。本遺跡では多くの土器焼成窯が存在するが、その中の 1 基 (R17: 210) からは過焼成により形が歪んだ BRB や多くの土器片が出土し、窯周辺のトレンチ (R17: 203) では BRB、陶製具、ドア封泥などが見つかった。この窯とその周辺の空間は、排水溝を伴う街路によって区画されている。そのことから、ここに独立した土器工房が存在していたと推定されている (Alizadeh 1996)。また工房空間の一角 (R313) からは、棚に並べられていたような状態で 20 点程の BRB が出土し、BRB とともに製粉用の磨石や土製片口鉢も検出されている。街路の反対側やその周辺には一般住居が位置し (例: Q17: 401, R18: 410, 411)、そこから BRB が確認されている。テル頂上部では、モニュメントもしくは公共建築物に隣接する Room1006/1007 でいくつかまとまった状態で BRB が出土した。また、セス・ピット (cess-pit) と呼ばれる壁面が未焼成の日干しレンガで構築されたピットから多量の BRB が出土した (ピット 302, 303)。これに伴う形で石製容器やその他の土器も確認されている (Delougaz and Kantor 1996: 27)。ピット 903 からも大量の BRB が出土し、上記のものと同様に石製容器が確認され、注口土器も出土した (Alizadeh 2008)。出土した BRB の総数は破片も含め 25 万点にも達しており (Delougaz and Kantor 1996: 49)、これは他の遺跡でも類をみない多さである。

##### 2. ハジュネビ・テペ (Hacinebi Tepe) 遺跡

ハジュネビは、南東アナトリア、ユーフラテス河中流域に位置し、ウルク期から青銅器時代までの層位が確認されている。ウルク期の層位は A 期、B1 期、B2 期の 3 期に区分される<sup>11)</sup>。A 期から B1 期は南方ウルク文化との接触がなく、在地の文化が展開・発展したものとされ、B2 期になると南方ウルク文化が流入する一方、在地の文化も維持されると解釈されている (Stein 2001)。BRB はこの B2 期になり初めて確認され、エリア A (オペレーション 1, 14, 15) と呼ばれるテル頂上部と、西側テラス (オペレーション 16) から出土した (Stein and Misir 1996)。オペレーション 1 では 3m × 3m の範囲 (Locus 12, 16) から破片、完形品合わせて約 4300 点もの BRB が確認された。また、BRB に伴ってコニカル・ボウル<sup>12)</sup>、ひしゃく、赤色スリップ土器、注口、スサ混和のトレイまたは大皿、貯蔵用の甕が出土した (Stein and Misir 1994: 151)。その他、台所または調理施設や一般住居と思われる日干しレンガ作りの建築物からも出土している (Stein et al. 1996: 87)。調査者は BRB を食糧の生産、提供、貯蔵、運搬に関



わる多機能的な遺物であるとしている<sup>13)</sup> (Stein 2002: 151)。

### 3. ゴディン・テペ (Godin Tepe) 遺跡

ゴディン・テペは、ザグロス山中ケルヘ川流域に位置し、ウルク期から青銅器時代の層位が確認されている。ウルク期にはイランとメソポタミアを結ぶ交易の拠点となっていたと考えられている。ウルク期はIV期とV期に細分され、IV期でも少数のBRBが確認されているが、出土量が増加するのはV期になってからである。BRBが報告されているのは、円形の要塞址内に位置する貯蔵室 (Room 10) と、要塞遺構の反対側に位置する調理用施設である (Badler 2002; Weiss and Young 1975)。調理用施設でのBRBの大量廃棄は詳細については不明であるが、そうした行為が行われていたということは注目に値する。

### 4. テル・ブラク (Tell Brak) 遺跡

テル・ブラクはシリア北東部、ハブール川流域に位置しハラフ期から青銅器時代以降の層位が確認されている。ウルク期以降にはこの地域のセンターとして機能していたことが想定されている。またウルク後期には「眼の神殿」が検出されている。ウルク期の層位はTW18-19 (LC2), TW14-17 (LC3), TW13 (LC4), TW12-11 (LC5) の4期に区分される (Oates 2002)。TW15では出土状況が不明なものの少量のBRBが確認され、TW14では中庭から出土している。TW13の住居からは、在地の土器や、注口土器とともにBRBが出土している。TW12ではオープンから182点、ピットから12点出土している (Oates and Oates 1993)。その他「眼の神殿」でも出土が確認されている (Mallowan 1947)。大量一括廃棄は行政遺構または専業エリアでも確認されるという (Golder 2010: Table 3)。

### 5. その他

スーサ (Susa) 遺跡、ヤフヤ (Yahya) 遺跡、ウカイル (Uqair) 遺跡、エリドゥ (Eridu) 遺跡、ウルク (Uruk) 遺跡、ニネヴェ (Nineveh) 遺跡、その他多くの遺跡で公共建造物やその他の場所での廃棄行為が窺える (Beal 1978; Golder 2010: Table 3)。例えば、スーサ遺跡III期ではピットから完形のBRBが大量に出土し、それとともに少量の小型壺やヒツジ・ヤギなどの動物骨、そして印章・印影など様々なものが検出された (Wright 1998: 187)。

## V. 大量一括廃棄にみる「饗宴」の可能性

以上、各遺跡におけるBRBの出土状況を概観してきた。ここで注目すべき点は大量一括廃棄という行為、それが行われた空間、そして共伴遺物であろう。そこでこれらを考慮し、フォレストの「エリートが祝宴を行う際に使用した鉢」という考えを再浮上させたいと思う。本稿ではこの考えを「饗宴」という概念で捉え直してみたい。饗宴とは、「特別な目的または機会において、特別な食糧を複数の人員で食すること」と定義される (Hayden 2001: 28)。この行為が執り行われる機会として、婚姻、葬送儀礼、通過儀礼、宗教的儀礼、交換などがあ

る。また、エリートが饗宴によって得られる利益は以下のようなものが示されている (Hayden 2001: 29-30)。1) 労働力の動員, 2) 集団内における協力関係の構築, または敵対集団の排除, 3) 集団間における支持・協力関係の構築, 4) 余剰の投資, 5) 集団の繁栄・宣伝, 6) 相互的負債を通じた政治的権力の発生, 7) エリートによる余剰の搾取, 8) 人気取り, 9) 罪の補償, である。

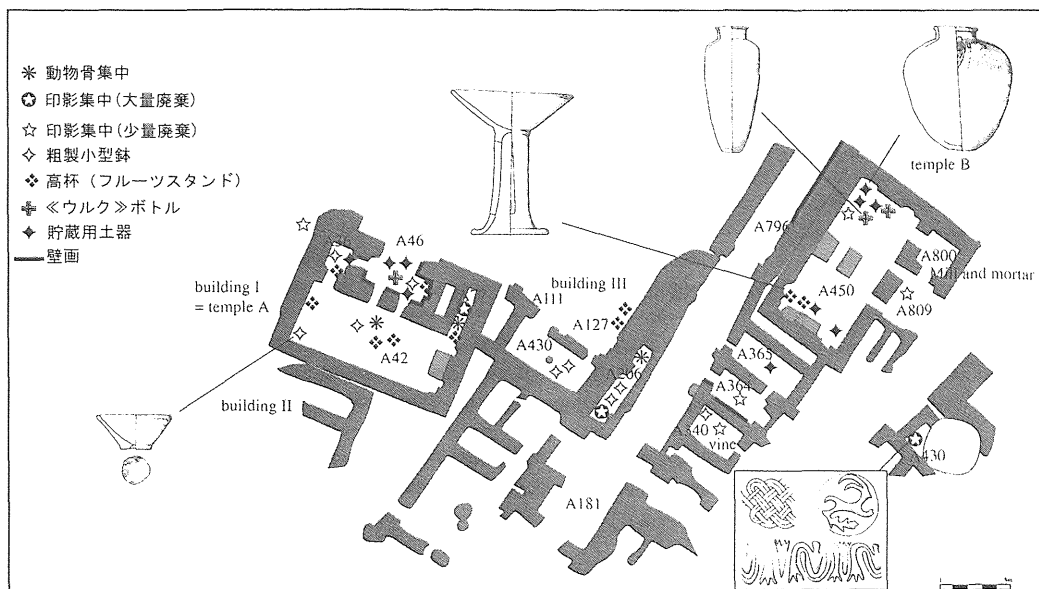
饗宴研究は、ウルク期以降を対象にしたものならば文献資料や図像学的分析などによるものが多くあるが (例えば Schmandt-Bessera 2001; Pollock 2003), ウルク期ではそれに焦点を当てた論考は少ない (Forest 1987; Helwing 2003)。ヘルウィングは、考古学的に確認される饗宴の痕跡を 1) 饗宴の際に使用する大量の飲食物を準備するための調理施設, 特別な土器, 使用後にそれらを廃棄したピット (土器や動物骨などを伴う), 2) 村の広場, および人々の出入りが制限され非日常的空間を演出する公共建造物やプラットフォーム, 3) 権力表示や地位向上の際に必要な威信財や交換を示す遺物, の 3 点とした。そして東アナトリアに位置するアスランテペ (Arslantepe) 遺跡 VIA 層 (ウルク後期併行) では饗宴が行われていた可能性が高いと指摘した (Helwing 2003)。その根拠としては, 1) 明らかに普通の集落とは異なり建物自体がステータスを示し, 貯蔵と食事のための準備設備がある, 2) 小さな祭壇または貢献台が存在し, フルーツスタンドが確認される, 3) 粗製小型鉢, 動物骨そして印影が全て小さな空間に廃棄されているという 3 点を挙げている (第 3 図)。

調査者であるフランジパネは, VIA 層の Temple A, A340, A206 の遺物の出土状況から, 大型容器から小型のカップを使った液体, 粉, 肉などの分配があったと指摘する (Frangipane 1997)。

ヘルウィングがアスランテペで確認した事象は, 全てではないものの, 先に概観した遺跡にも当てはまるものがある。例えば, ハジネビでは明確な遺構からの出土ではないものの, 饗宴に必要なとされたと思われる土器アセンブリッジの廃棄が確認されている。また, チョガ・ミシュやスーサでのピットへの BRB の大量一括廃棄もこの行為後に行われた可能性が指摘できる。特にスーサではそのピットから, 動物骨や行政的遺物が共に出土している。また, 注口土器を含むアセンブリッジから考えると飲酒による饗宴も指摘できるかもしれない (Frangipane 1994; Joffe 1998)。今後, 各遺跡でのより詳細な分析が必要になることは言うまでもないが, 可能性のひとつとして BRB が饗宴の際に使用された遺物であると想定できるのではないだろうか。こういった大量一括廃棄といった現象をより積極的に評価していく必要があるだろう。

## VI. おわりに

製作技術にかんしては, 型製作であったことを改めて確認することはできたが, 地面を掘りくぼめた型かその他の型であったのかについては明らかにすることができなかった。これは従来の見解と大きく違うものではないが, 実際の資料から再確認できた点は意義があると思われる。機能については, BRB の「規格性」に否定的な立場をとり, その他の見解もいくつか検討した。そして, 出土状況を整理し, 「饗宴」の際に使用された土器であるという可能性を提



第3図 アスランテペVI A層 饗宴空間および使用遺物 (Helwing 2003 を改変)

示してみた。

いくつかの見解を示してみたが、本稿において主張したいのは以下のことである。先に指摘した「饗宴」という行為は念頭には置くものの「ハレ」と「ケ」、「祭祀具」と「生活用具」といった二項対立的な図式ではBRBの特性を明らかにすることはできないのではないかということである。つまり、BRBは二面性を併せ持つ遺物であったと考えられる。日本では、カワラケの出土量の多寡は「都市の中での社会的な階層性を示す」と共に、「京都との文化的あるいは政治的な距離を示す」指標とされている(小野 1993: 59)。またカワラケは、都市や村落で日常的な食器として利用される一方で、権力の象徴といった社会的・儀礼的機能も有していたと考えられている(高橋 2008: 48; 吉岡 1997: 128)。こうした点は少なからずBRBにも当てはまると考えられる。

つまり、BRBの出土量は南メソポタミアとの関係性やそこからの影響力の強さを反映している可能性がある。その好例がアスランテペである。本遺跡では饗宴の際に使用されたと思われる小型の土器が大量に出土しているにも関わらず、BRBの検出例は1点に限られる。つまり、ウルク文化の影響を受けつつも在地社会の独自性を維持していたと言える。またBRBが日常的場面で使用されている例としては、チョガ・ミシュにおいて一般住居とされる区域から出土していることを挙げることができる。さらにハジネビでも台所とされる遺構から、BRBに伴い注口土器や壺、砥石に石杵などの生活用具が出土している(Stein et al. 1996)。これらはあくまでも断片的ではあるが、日常的な使用が想定される。以上のことを考慮すれば従来のように、広い地域に分布するBRBに単一の機能だけを想定するという一元的な見方は妥当ではないと言える。BRBの拡散に際し、地域や社会集団によってその用いられ方が異なっていた可能性

は十分考えられるのではないだろうか。

本稿は、多くの研究者が賛同する BRB の規格性に対してあえて批判的な立場をとった。確かにここで示した饗宴や二面性という可能性は推測の域をでるものではない。しかし、BRB の機能について一定の見解を示すことはできなかったのではないかと思う。今後は BRB 以外の遺物にも注目し、都市形成期における南メソポタミアと周辺地域との関係性により詳細に迫ってきたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたって、指導教員である三宅裕先生にご配慮いただいた。また、本稿で使用した BRB に関しては、長谷川敦章氏に便宜を図っていただいた。その他、増森海笑ダモンテ氏からは数多くの示唆をいただいた。末筆ながら、記して深謝申し上げます。

## 註

- 1) ウルク期は基本的に前・中・後期の 3 期に区分される。しかし、1998 年にアメリカで行われたサンタフェ会議にて LC (Late Chalcolithic) 編年が提唱され、ウルク期以前を含む銅石器時代後期 (前 4300-3000) が大まかに 5 期に区分された: LC1-LC5 期 (Rothman 2001)。ウルク期の各時期と LC 編年の対応関係は以下の通りである。南方ウルク前期: LC2, 南方ウルク中期前半: LC3, 南方ウルク中期後半併行期: LC4, 南方ウルク後期: LC5。
- 2) ジョンソンが行った算出方法と同様のものを使用した (Johnson 1973: 135 を参照)。
- 3) 混和材を入れる目的は諸説あるが、一般的なものとしては成形段階での型崩れを抑え、乾燥段階でのひび割れを防ぎ、焼成段階での効率を向上させるというものである (Rice 1987)。また、スサの混和に関しては焼成時間の短縮化と焼成効率の向上という推定がある (小泉 2006)。
- 4) ジェベル・アルーダ (Jebel Aruda) 遺跡出土の BRB を基に手づくねであると主張した (Kalsbeek 1980)。
- 5) 1 つの中心的集落で生産されたものではなく各地で生産されていた可能性は、バルマンによって既に指摘されており、本調査はこの結果を追認する形となっている (Barman 1989)。
- 6) チョガ・ミシュには 2 つの工房があり、異なる粘土が使用され片方が地方に分配された可能性や、他のセンターから分配された可能性もあると指摘する (Alizadeh 2008)。
- 7) 内訳: KS-36, n=21; KS-39, n=32; KS-59, n=57; KS-108, n=43; スーサ遺跡, n=36。
- 8) 3 か所から数値を算出 (Beale 1978: Fig. 1 を参照)。
- 9) a. ninda, "bread", b. gur, "to eat", c. tinur, "oven" を引用 (Millard 1988: Fig. 2 を参照)。
- 10) エジプトでパン焼き型とされる土器 (Bedia bowl) と BRB を比較。比較内容は器形、胎土、製作技術、出土コンテキスト、変遷過程などである。また、エジプトの壁画資料からも推定している。
- 11) A 期 (南方ウルク前期併行: LC2), B1 期 (南方ウルク中期前半: LC3), B2 期 (南方ウルク後期: LC4)
- 12) 小型の円錐形土器: まれに嘴形の注ぎ口が見られる。
- 13) エリソンもまた様々な用途に使われたと想定する (Ellison 1984)。

## 引用・参考文献

- Alizadeh, A. 2008 *Chogha Mish: The development of a prehistoric regional center in lowland Susiana, Southwestern Iran. Final report on the last six seasons of excavations, 1972-1978*. The University of Chicago Press.
- Algaze, G. 2005 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization. Second*

- edition. The University of Chicago Press.
- Balfet, H. 1980 A propos du métier d'argile: exemple de dialogue entre ethnologie et archéologie, In M.T. Barrelet (ed.) *L'archéologie de l'Iraq: du début de l'époque néolithique à 333 avant notre ère: perspectives et limites de l'interprétation anthropologique des documents, Paris 13-15 Juin, 1978, Paris*. Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 71-84.
- Barman, J. C. 1989 Neutron activation analysis Bevelled rim bowl and other Uruk ceramic from the Susiana Plain. Southwestern Iran. *Paléorient* 15-1, p. 289.
- Badler, R. V. 2002 A Chronology of Uruk Artifacts from Godin Tepe. In N. Postgate (ed.), *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East*. British School of Archaeology in Iraq, pp. 79-109.
- Beale, T. 1978 Bevelled rim bowls and their implications for change and economic organization in the later 4th millennium B.C. *Journal of Near Eastern Studies*. 37, pp. 283-313.
- Buccellati, G. 1990 Salt at the dawn of history: the case of the beveled-rim bowls. In Paolo Matthiae, Maurits van Loon, and Harvey Weiss (eds.), *Resurrecting the past: a joint tribute to Adnan Bounni*. Leiden: Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten, pp. 17-40.
- Chazan, M. and L. Mark. 1990 An ancient analogy: pot baked bread in ancient Egypt and Mesopotamia. *Paléorient*. 16-2, pp. 21-35.
- Charvat, P. 2002 *Mesopotamia before history*. London: Routledge.
- Crawford, H. 2004 *Sumer and the Sumerians. Second edition*. Cambridge University Press.
- Delougaz, P. 1952 *Pottery from the Diyahra region*. The University of Chicago Press.
- Delougaz, P and H. J. Kamtor. 1996 *Choga Mish Vol.1: The First Five Seasons of Excavations 1961-1971*. Oriental Institute Publications 101 Chicago. The University of Chicago Press.
- de Genouillac, H. 1934 *Fouilles de Telloh. Epoques Présargoniques, vol. 1*, Paris, Paul Geuthner.
- Ellison, R. 1984 The Uses of Pottery. *Iraq*. 46-1, pp. 63-68.
- Forest J, P. 1987 Les beveled rim bowls: nouvelle tentative d'Interprétation. *Akkadica*. 53, pp.1-24.
- Frangipane, M. 1994 Repertorio ceramico e consumo di liquidi alimentari in alcune società pre-e protourbane del Vicino Oriente. In L. Milano (ed.), *Drinking in Ancient Societies: History and Culture or Drinks in the Ancient Near East*. American Oriental Society, pp. 227-224.
- Frangipane, M. 1997 A fourth millennium temple/palace complex at Arslantepe-Malatya: North-south relations and the formation of early state societies in the northern regions of southern Mesopotamia. *Paléorient*. 23-1, pp. 45-73.
- Goulder, G. 2010 Administrators bread: an experiment-based re-assessment of the functional and cultural role of the Uruk bevel-rim-bowl. *Antiquity*. 84, pp. 351-36.
- Hayden, B. 2001 Fabulous feasts: A prolegomenon to the importance of feasting. In B. Hayden (ed.), *Archaeological and ethnographic perspectives on food, politics, and power*. Washington. Smithsonian Institution Press, pp. 23-64.
- Helwing, B. 2003 Feasts as a social dynamic in Prehistoric Western Asia-three case studies from Syria and Anatolia. *Paléorient*. 29-2, pp. 63-86.
- Joffe, A. H. 1998 Alcohol and social complexity in ancient Western Asia. *Current Anthropology*. 39-3, pp. 297-322.
- Jones, J. 1996 Standardized volumes? Mass-produced bowls of the Jemdet Nasr period from Abu Salabikh, Iraq. *Paléorient*. 22-1, pp. 153-160.
- Johnson, G. 1973 *Local exchange and early state development in southwestern Iran*. University of Michigan Museum

- of Anthropology. Anthropological Papers 51.
- Johnson, G. 1987 The changing organization of Uruk administration on the Susiana Plain. In F. Hole (ed.), *The Archaeology of western Iran*. Washington. D.C: Smithsonian Institution Press, pp. 107-39.
- Kalsbeek, J. 1980 Lacéramique de série du Djebel 'Aruda (àl' époque d 'Uruk). *Akkadica*. 20, pp. 1-11.
- Mallowan, M. 1947 Excavations at Brak and Chagar Bazar. *Iraq*. 9, pp.1-87.
- McAdam, E. and H. S. Mynors 1988 Tell Rubeidheh: pottery from the Uruk mound, In R. G. Killick (ed.), *Tell Rubeidheh: an Uruk village in the Jebel Hamrin*. Warminster: Aris and Phillips/British School of Archaeology in Iraq and the Directorate of Antiquities, pp. 39-76.
- Milard, A. 1988 The beveled-rim bowl their purpose and significance. *Iraq*. 50, pp. 49-57.
- Miller, A. 1981 Straw tempered ware, In H. T. Wright (ed.), *An early town on the Deh Luran Plain: Excavations at Tepe Farukhabad*. Ann Arbor (MI): Museum of Anthropology, University of Michigan, pp. 126-129.
- Nicholas, I. M. 1987 The function of beveled-rim bowl: a case study at the TUV mound, Tal-e Malyan, Iran. *Paléorient*. 13-2, pp. 61-72.
- Nissen, H. 1970 *Grabung in den Quadraten K/L XII in Uruk-Warka*. Baghdader Mitteilungen 5, pp. 101-91.
- Nissen, H 1988. *The early history of the ancient Near East 9000-2000 BC*. Chicago: University of Chicago Press.
- Nissen, H., Damerow, P. and R. Englund (translated by P. Larsen) 1993 *Archaic Bookkeeping: Early Writing and Techniques of Economic Administration in the Ancient Near East*. The University of Chicago Press.
- Nissen, H. 2002 Uruk: Key site of the period and key site of the problem. In N. Postagat (ed.), *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East*. British School of Archaeology in Iraq, pp. 1-16.
- Oates, J. 2002 Tell Brak: The 4th Millennium Sequence and Its Implications. In N. Postagat (ed.), *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East*. British School of Archaeology in Iraq, pp. 111-121.
- Pollock, S. 1999 *Ancient Mesopotamia*. The Cambridge University Press.
- Pollock, S. 2003 Feasts, Funerals, and Feast Food in Early Mesopotamian States. In T. L. Bray (ed.), *The archaeology and politics of food and feasting in early states and empires*. Springer, pp. 17-38.
- Pottes, D.T. 2009 Beveled-rim bowl and bakeries: evidence and explanations from Iran and the Indo-Iranian borderlands. *Journal of Cuneiform Studies*. 61, pp. 1-23.
- Rice, P. M. 1987 *Pottery Analysis: A Sourcebook*. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Schmandt-Bessera, D. 2001 Feasting in the Ancient Near East. In M. Dietler and B. Hayden (eds.), *Feasts. Archaeological and ethnographic perspectives on food, politics, and power Smithsonian Series in Archaeological Inquiry*. Washington - London Smithsonian Institution Press, pp. 391-402.
- Stein, G. J. and A. Misir 1994 Mesopotamian-Anatolian interaction at Hacinebi, Turkey: Preliminary report on the 1992 excavations. *Anatolica*. 20, pp.145-190.
- Stein, G. J. and A. Misir 1996 The fourth-millennium occupation of Hacinebi. *American Journal of Archaeology*. 100-2, pp. 206-22.
- Stein, G. J., Edens, C., Miller, N., Özbal, H., Pearce, J. and H. Pittman 1996 Hacinebi, Turkey: Preliminary Report on the 1995 Excavation. *Anatolica*. 22, pp. 85-128.
- Stein, G. J. 2001 Indigenous Social Complexity at Hacinebi (Turkey) and the Organization of Uruk Colonial Contact. *Uruk Mesopotamia & Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation: School of American Research Advanced Seminar Series*. SAR press, pp. 265-305.
- Stein, G. J. 2002 The Uruk expansion in Anatolia: A Mesopotamian colony and its indigenous host community at Hacinebi, Turkey. In N. Postagat (ed.), *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East*.

- British School of Archaeology in Iraq, pp. 79-109.
- Strommenger, E. 1980 *Habuba Kabira: eine Stadt vor 5000 Jahren*. Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein.
- Surenhagen, D. 1974/5 Untersuchungen zur Keramikproduktion innerhalb der spat-Urukzeitlichen Siedlung Habuba Kabira-Sud in Nord-Syrien. *Acta Praehistorica et Archaeologica*. 5-6, pp. 43-164.
- Weiss, H. and T. Young 1975 The Merchants of Susa Godin V and Plateau-Lowland Relations in the Late Fourth Millennium B.C. *Iran*. 13, pp. 1-17.
- Wright, H. and G. Johnson 1975 Population, exchange, and early state formation in southwestern Iran. *American Anthropologist*. 77, pp. 267-289.
- Wright, H., Miller, N. and R. Redding 1980 Time and Process in an Uruk Rural Center. In M. T. Barrelet (ed.), *L'archéologie de l'Iraq: du début de l'époque néolithique à 333 avant notre ère : perspectives et limites de l'interprétation anthropologique des documents, Paris 13-15 Juin, 1978*. Paris, Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 265-284.
- Wright, H. 1998 Uruk states in southwestern Iran. In G. Feinman and J. Marcus (eds.), *Archaic States*. Santa Fe. School of American Research Press, pp. 173-197.
- Wright, H. 2001 Cultural action in the Uruk world. In Rothman, M. (ed.), *Uruk Mesopotamia & Its Neighbor: Cross-cultural Interaction in the Era of State Formation*. Santa Fe. School of American Research Press, pp. 123-148.
- Young, T.C. Jr. 1986. Godin Tepe Period IV / V and Central Western Iran at the End of the Fourth Millennium. In U. Finkbeiner and W. Röellig (eds.), *Gamdat Nasr: period or regionale ? : papers given at a symposium held in Tubingen*. Dr Ludwig Reichert Verlag, pp. 212-228.
- 大津忠彦・常木 晃・西秋良宏 1997『西アジアの考古学』 同成社.
- 小野正敏 1993「中世みちのくの陶磁器と平泉」『日本史の中の柳之御所』 吉川弘文館.
- 川島尚宗 2009『縄文時代後・晩期社会の研究—生産と饗宴からみた複雑化—』筑波大学博士学位論文.
- 小泉龍人 2001『都市誕生の考古学』 同成社.
- 小泉龍人 2006「古代西アジアの土器製作技術—文化の拡散経路と都市化—」『国史館考古学』 第2号 1-22 頁.
- 高橋照彦 2008「器からみた宴—古代から中世へ—」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『場・かわらけ・権力 宴の中世』 考古学と中世史研究 5 35-68 頁.
- 富田 徹 1998『都市と都市とを繋ぐもの—土器から見た都市形成期の地域間交流—』 筑波大学大学院中間提出論文.
- 吉岡康暢 1997「カワラケ小考」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第74集 125-130 頁.

## Some remarks on Bevelled-rim bowls in the Middle and Late Uruk periods

MIYAKE, Chikashi

The aim of this paper is to revisit the manufacturing techniques and function of Bevelled-rim bowls (BRB), which were widely distributed in Mesopotamia and its surrounds during the 4th millennium BC with the development of urbanization. The distribution of BRB is believed to be closely related to “Uruk expansion” phenomena. Based on firsthand observations of three BRB stored in the University of Tsukuba, it was confirmed that these bowls were produced by molding however it is not clear which type of material was used for the mold.

Different opinions of the function of BRB have been suggested. One of the most predominant interpretations was that they were used as ration bowls for distributing grain. However, it has been also pointed out that BRB do not necessarily show clear size and volume standardization. Examining the excavation contexts in detail indicated that enormous numbers of BRB were found abandoned in pits together with animal bones and other pots at several sites. This evidence may indicate that BRB were used for feasts which were often associated with rituals.

There is a possibility that BRB were used in different contexts and had various functions. The evidence from Choga Mish and Hacinebi illustrates that BRB were utilized both in domestic activities and communal rituals such as feasts. A similar interpretation has been suggested for “kawarake” pottery in Medieval Japan. Therefore, a simplistic dichotomy of whether they are “domestic tools” or “ritual tools”, should be abandoned. Taking their widespread distribution into consideration, it is also inappropriate to assume a single function for BRB and it is plausible that BRB played different roles depending on regions and social groups.